



第Ⅱ章

都市の将来像と将来都市構造

- 1 将来都市像
- 2 将来都市構造

1 将来都市像



(1) 将来都市像についての基本的考え方

苫小牧市の現在の市街地における可住地面積*は約 3,225ha であり、平成 27 年国勢調査における人口密度は約 52 人 /ha となっています。今後ともこの市街地規模を維持した場合、2040 年度では人口密度が約 45 人 /ha 程度となります。

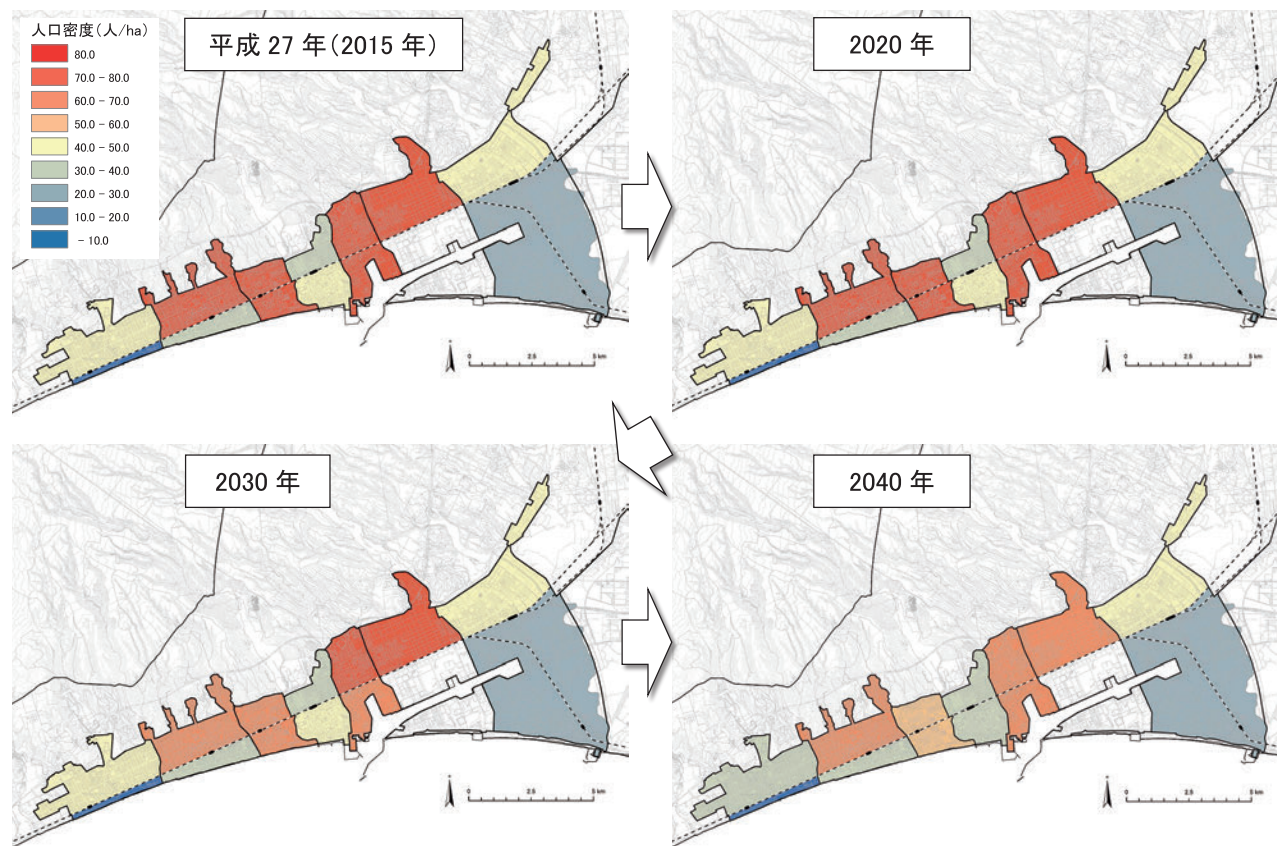
この数値は、人口集中地区(DID)の要件である 40 人 /ha は上回るものの、都市計画運用指針(国土交通省)における住宅用地の目標とすべき人口密度である 80 人 /ha を大きく下回っており、市街地規模の縮小についての検討が必要になってくると考えられます。

一方で、市街地規模を縮小するには市民の合意形成が必要となるため、全国的にもほとんどの市町村が決断できない状況にあります。

今後、人口減少に伴う税収減や人口密度の低下による行政サービスの非効率化が顕著になると考えられるなかで、持続可能な都市経営を行うためには、市街地規模を縮小する、あるいは日常生活が身近な地域で可能となるコンパクトな分節型・集約型都市構造へ転換する、さらには市街地のなかで行政サービス水準に差をつけるなどの抜本的な取組が求められています。

こうした中、人口減少を少しでも抑え、健全な都市経営につなげていくためには、生活の基本となる雇用の確保が極めて重要であることから、本マスタープランにおいては、雇用をキーワードとした次のような将来都市像を設定します。

■人口密度の将来推計



資料：総務省「国勢調査」、国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口(平成 30(2018)年推計)」

【将来都市像】

持続的な雇用が育む人間環境都市・苫小牧

～産業と環境が調和し、生活の魅力と活力に満ちた持続的都市の形成～



苫小牧市は、総合計画（基本構想）において、目指すべき理想の都市を「人間環境都市」としています。「人間環境都市」は、人間主体のまちであり、豊かな自然と調和した文化の薫り高く潤いのある快適な生活環境の中で、共に生き生きと心豊かに暮らしながら、全ての市民が持てる能力で社会に貢献し、未来に向かって挑戦し続けるまちです。

この「人間環境都市」の実現に向けて本マスタープランでは、市民はもとより多くの方が、苫小牧に住み続けられる・住みたくなる、行ってみたいくなるよう、「いつでも働く場のあるまち」、「生活に便利で誇りが持てるまち」、「自然の魅力を満喫できるまち」の形成に取り組みます。

○いつでも働く場のあるまち

「人間環境都市」の実現にあたっては、人々が苫小牧市に未来永劫住み続けられるよう、生活の糧となる持続的な雇用の確保が極めて重要です。

苫小牧市は、北海道の海の玄関口である苫小牧港と空の玄関口である新千歳空港を擁し、高速道路をはじめとする広域幹線道路などにより、人流・物流の結節点にある道内屈指の産業拠点都市として発展しています。したがって、持続的な雇用の確保のためには、今後とも市街地に近接した豊かな自然環境との調和を図りながら、既存産業の育成及び環境関連産業、IT産業、食品関連産業など新たな産業立地の促進に向けた都市基盤の整備が必要です。（【目標 1】）

○生活に便利で誇りが持てるまち

空洞化がみられる中心部においては、都市の魅力と競争力の向上に向けて、都市機能の充実により「まちの顔」となる都市拠点の形成を進めるとともに、東西に細長い市街地の一定の地域ごとに医療・福祉、商業、交流などの身近な生活利便機能が集積した生活拠点を形成することによって、新たな雇用機会の拡大と誰もが都市的サービスを容易に受けることができる、生活の魅力と活力に満ちた都市形成が必要です。

（【目標 2】及び【目標 3】）

さらに、これらの拠点の形成にあたっては、市民が都市の歴史や文化、自然資源を大切にしながら、生活の魅力と活力に満ちたまちを次世代に継承するため、自らまちづくり活動に参加し、誇りを持って持続的な都市づくりにつなげていく必要があります。（【目標 5】）

○自然の魅力を満喫できるまち

苫小牧市は、産業拠点都市でありながらにして、錦大沼公園、北大研究林、ウトナイ湖、弁天沼などの貴重な自然資源や、漁港、長い海岸線といった海洋資源を有していることから、これらの資源を活かした交流エリアの形成により、自然の魅力を享受できる場を確保するとともに、交流人口の拡大と雇用機会の確保を目指す必要があります。（【目標 4】）

(2) まちづくりの目標

【目標1】産業立地の促進に向けた都市基盤などの整備

苫小牧市は、国際港湾、国際空港を擁し、さらには高速道路のI.C.や鉄道駅があるなど、優れた広域交通結節機能を有しており、こうした優位性を活かしながら更なる産業立地を誘発する都市基盤の整備を進めるとともに、これら産業に携わる人々の快適な生活交通の確保を図ります。

1 産業立地を誘発する都市基盤の整備

〈具体的施策メニュー〉

- 広域交通ネットワーク（自動車専用道路）の整備促進
- 都市の骨格や物流機能を支える主要幹線道路の整備・機能強化
- 東西交通の混雑緩和や移動の円滑化、津波避難などに対応した南北交通ネットワークの強化
- 港湾機能及びアクセスの強化
- 空港機能及びアクセスの強化

2 快適な生活交通の確保

〈具体的施策メニュー〉

- 日常生活を支える市内幹線道路・補助幹線道路の安全性や利便性、快適性の向上
- 東西交通の混雑緩和や移動の円滑化、津波避難などに対応した南北交通ネットワークの強化
- 誰もが安心して移動できる歩行空間のユニバーサルデザイン化の促進
- 自動車や徒歩による移動を補完する自転車走行空間のネットワークの形成
- 将来都市構造に対応した持続可能な公共交通網への再編

【目標 2】 苫小牧市の顔となる都市拠点の形成

苫小牧駅から国道 36 号沿道に至るエリアは、東胆振地域の中心であり、まちの顔となる「都市拠点」と位置付け、未利用施設・未利用地の活用を念頭におきながら、公共施設の再編・集約化による文化交流機能の導入や、業務・教育・宿泊・飲食機能などの立地誘導を図るとともに、魅力ある都市景観の整備などにより、都市機能の更なる集積と昼夜間人口の拡大、ひいては雇用機会の拡大につなげていきます。

1 産業や生活を支える都市機能の再編・集積

〈具体的施策メニュー〉

- 商業・業務、ビジネス交流、観光・文化交流、宿泊、医療・福祉、子育て支援、高等教育などの高次都市機能*の集積
- 公共施設の集約化による新たな文化交流拠点（市民ホール）の整備
- 苫小牧市の魅力を味わうことのできる、魅力ある個店の創出と集積
- 苫小牧市の顔に相応しい、人を中心としたパブリックスペース*の創出
- 都市拠点隣接地における利便性を活かした都心居住の推進
- 商業関係者や市民・企業・行政が連携したエリアマネジメントの推進

2 広域交通結節機能の強化

〈具体的施策メニュー〉

- 苫小牧駅における駅前広場の機能再編・強化とともに、旧バスターミナル・周辺施設を含めた駅周辺の一体的な再整備の推進による、広域交通結節点の再整備
- 歩行空間のユニバーサルデザイン化の推進と多様な交通手段の乗り継ぎ利便性の向上
- 都市拠点と各地区の拠点を結ぶバス路線の充実
- 苫小牧駅から新千歳空港へのアクセス強化

【目標3】身近な生活利便機能が集積した生活拠点の形成

東西に細長く形成されている市街地の一定の地域ごとに、医療・福祉、商業、交流などの身近な生活利便機能が集積した生活拠点を形成し、これらが公共交通によりネットワーク化されることによって、新たな雇用機会の拡大と誰もが都市的サービスを容易に受けることができるまちづくりを実践していきます。

生活拠点の形成を進める場所としては、既存の生活利便機能の集積の程度や交通利便性、背後地の人口集積などから、明德町、日新町、三光町、沼ノ端駅周辺の4地区とします。このうち、沼ノ端駅周辺は近年人口の伸びが顕著で、近隣に多くの企業が立地しているとともに、今後の産業立地を支える役割を担うと考えられることから、中心部の都市拠点機能を一部補完する複合型生活拠点の整備を進めます。

〈具体的施策メニュー〉	複合型生活拠点 (沼ノ端駅周辺)	生活拠点 (明德町・日新町・ 三光町)
●商業、医療（病院）・福祉、教育、コミュニティ・交流機能などの生活利便機能の集積	○	
●商業、医療（診療所）・福祉、教育、コミュニティ・交流機能などの日常生活を支える生活利便機能の集積		○
●商業・業務施設、宿泊施設など、近隣の産業や雇用を支える都市機能の集積と高度化	○	
●子育て支援機能と地域交流機能を導入した複合施設の整備	○	
●公共交通（鉄道・バスなど）の乗り換え拠点の整備	○	
●公共交通（バスなど）の乗り換え拠点の整備		○
●公営住宅の計画的な維持・更新	○	○
●サービス付き高齢者向け住宅や若者向けの民間賃貸住宅の整備	○	○
●地域住民が立ち寄り、集まりやすいオープンスペース*の整備	○	○
●生活拠点におけるバリアフリー化の推進	○	○

【目標 4】 貴重な自然資源・海洋資源を活かした広域的な交流エリアの形成

苫小牧港漁港区周辺やふるさと海岸は、港町を感じられる貴重な資源であり、集客機能の充実や環境整備、イベントの開催などにより、市民はもとより交流人口の拡大と雇用機会の確保を図っていく必要があります。

苫小牧市の良好な自然資源である錦大沼公園、北大研究林、ウトナイ湖、弁天沼・勇払原野、及びそれぞれの周辺を、自然の保全と調和した利活用を行う観光交流エリアと位置付けるとともに、これらの資源と連携しながら、国際港湾・国際空港に近接する地理的優位性を活かした国際リゾート地域の形成を図り、交流人口の拡大と新たな雇用機会の創出を目指します。

1 みなとを活かした観光交流の拡大

〈具体的施策メニュー〉

- 海の駅「ぷらっとみなと市場」とその周辺における人を呼び込むための魅力とアクセス性の向上、及び漁港区の機能強化
- フェリーターミナルにおける北海道の顔となる海の玄関口の形成
- 勇払マリーナにおける多様な交流を生むマリンレジャーの拠点形成
- 中心市街地から親水空間である「ふるさと海岸」をつなぐ円滑な動線の確保
- 北ふ頭緑地（キラキラ公園）などにおける官民が連携した公園管理やパークマネジメント*の促進

2 豊かで貴重な自然環境を活かした交流の創出

〈具体的施策メニュー〉

- 錦大沼公園、北大研究林、ウトナイ湖、弁天沼・勇払原野、及びそれぞれの周辺地域における良好な自然環境の保全
- 道の駅「ウトナイ湖」における情報発信や地場産品の開発・販売促進、ウトナイ湖の自然景観、ウトナイ湖野生鳥獣保護センター・サンクチュアリネイチャーセンターなどの活用による魅力ある観光交流拠点の形成
- 錦大沼公園における観光・交流機能の強化と、官民が連携した公園管理やパークマネジメントの促進
- グリーンツーリズム*や景勝地の散策ネットワークなど、自然環境や農業、景観などの地域資源を活用した地域づくりの推進
- 民間活力を活かした北海道の自然・食・文化の体験、健康増進、MICE*、エンターテインメント機能の導入による総合的な国際リゾート地域の形成

【目標5】市民参加による協働のまちづくりの推進

1 都市拠点におけるエリアマネジメント

魅力ある都市拠点を形成するためには、地域自らまちづくりに取り組む「エリアマネジメント」の導入が求められます。エリアマネジメントには、快適な地域環境の形成とその持続性の確保や地域活力の回復・増進、資産価値の維持・増大、市民・事業主・地権者などの地域への愛着や満足度の高まりといった効果が期待できることから、行政と地域が歩調を合わせながら、持続可能な協働のまちづくりの実践とともに、まちづくりの担い手づくりにつなげていく必要があります。

〈具体的施策メニュー〉

- 商店会同士や市民・企業・行政が連携したエリアマネジメントの推進
- 緑ヶ丘公園や市民文化公園などにおける官民が連携した公園管理やパークマネジメントの促進

2 生活拠点の運営への市民参加

市民はまちづくりの主役であり、身近な地域に関心を持ち、積極的にまちづくりに参加していく必要があります。具体的には、子育て支援や高齢者支援の場となる生活拠点施設の運営（指定管理者など）のほか、声掛け、見守りなどの日常的な地域住民との生活上の助け合い、アダプトプログラム*の導入による地域の道路・公園などの環境整備に関わることが考えられます。

〈具体的施策メニュー〉

- 地域・高等教育機関・行政の連携による、学生や地域住民が参加する多世代コミュニティの形成など、地域の課題解決に向けた実践の場の形成
- 錦大沼公園や北星公園、北ふ頭緑地（キラキラ公園）などにおける官民が連携した公園管理やパークマネジメントの促進
- 学校、商業施設、公園などの主要施設を活用した花やみどりのまちづくりの実践
- 「木もれびの道」や公園、河川空間など、地域住民やコミュニティによる維持・管理活動の促進
- 「そよ風と遊ぶ道」や公園など、地域住民やコミュニティによるみどり豊かなまちづくりの実践
- 市民との協働による日の出公園の防災機能強化・充実

2 将来都市構造



将来都市像の考え方を踏まえ、将来の都市構造を次のように設定します。

苫小牧市の将来都市構造として、

3つの都市軸と1都市拠点・4生活拠点を結ぶラダー状の都市構造

をめざします。

(1) 都市軸

- ①都市骨格軸：東西に長い市街地を貫き、西側から沿道に公共施設や商業施設などが集積する国道36号から国道276号・道道苫小牧環状線を経て再び東側の国道36号に至る東西軸を都市骨格軸と位置付け、苫小牧市の生活・産業をはじめ広域的な連携を含めた骨太な都市骨格の形成を図ります。
- ②生活軸：国道36号に並行して東西を貫き、沿道に住宅をはじめ日常生活に必要な医療施設や商業施設などの身近な生活利便機能が集積する西側の道道苫小牧環状線から、市道双葉大通線・国道36号を経由して沼ノ端に至る東西軸を生活軸と位置付け、沿道に更なる生活利便機能の充実を図ります。
- ③産業軸：苫小牧市の産業集積の中核である西港から苫小牧東部地域に至る道道上厚真苫小牧線及び国道235号沿道を産業軸と位置付け、沿道及び背後地を含めて更なる産業集積の拡大を図ります。

(2) 拠点

- ①都市拠点：苫小牧駅から国道36号沿道に至るエリアは、広域交通結節機能や行政機能をはじめ、商業・業務、医療・福祉、文化・交流、宿泊などの多くの都市機能が集積していることから、苫小牧市の顔である都市拠点と位置付け、現在ある未利用施設・未利用地の活用や公共施設の再編・集約化、まちなか居住の推進などにより、高次都市機能の集積を図ります。
- ②生活拠点：東西に細長い市街地が形成されている苫小牧市においては、生活に必要な全ての都市機能を1カ所に集約化することは、都市機能を楽しむための移動距離が長くなり、必ずしも現実的とはいえないことから、生活軸の要所に医療・福祉、商業、交流などの身近な生活利便機能が集積した生活拠点の形成を図ります。

(3) 交通ネットワーク

- ①南北連絡軸：各拠点に集積する都市機能を効果的に享受できるよう、都市拠点・生活拠点と各都市軸や都市軸相互を南北に結ぶ南北連絡軸の整備を図ります。南北連絡軸においては、徒歩、自転車、バス、自家用車などによる移動が想定されるため、歩道空間・車道空間とも広幅員とし、快適な移動とともに、津波避難道路としての機能も併せ持つよう整備します。

- ②公共交通 : 都市拠点機能を享受する場合や生活拠点相互に不足する都市機能を補完し合う場合、東西方向の移動の確保が求められます。現在、鉄道が東西市街地を貫いていますが、鉄道の全ての駅前に生活に必要な都市機能が集積している訳ではなく、むしろ前述の生活軸に集積しているケースが多いため、バス交通による東西移動の確保が重要となります。このため、生活拠点と都市拠点を結ぶ路線や、生活拠点と背後地を結ぶ路線の乗換機能の強化を含めたバス網の再編による交通利便性の充実を図ります。

(4) その他

①自然を活かした交流エリア

: 苫小牧市の良好な自然資源である錦大沼公園、北大研究林、ウトナイ湖、弁天沼・勇払原野、国際リゾート地域、及びそれぞれの周辺を、自然環境の保全と調和した利活用を行う交流エリアと位置付けます。

②地区特性を活かした開発検討エリア

: 市街化調整区域に位置する樽前地域、植苗・美沢地域においては、地域における土地利用計画などを踏まえながら、自然環境の保全とともに地区特性を活かした開発を誘導するエリアと位置付けます。

③工業系市街地のうち自然に配慮した土地利用エリア

: 苫東地域は工業系用途地域が指定されていますが、良好な自然が残された樹林地や湖沼群などを有しており、関連計画と整合を図りながら、自然に配慮した土地利用エリアと位置付けます。

